

「旧東海道を歩く 鶴見～川崎」

○開催日:2026 年 7 月 18日(土)

○行程:JR 鶴見駅 ～ 旧東海道 ～ JR 川崎駅周辺

○ご案内:伊東哲也

JR 鶴見駅のエピソード

① 開業の歴史

鶴見駅は「品川」「横浜」「川崎」「神奈川」「新橋」に次ぐ、日本で 6 番目に営業を開始した駅となります。

日本の鉄道の歴史が本格的に動き出した「一般営業の初日」に誕生した、黎明期を支えた由緒正しい主要駅の一つです。

② 幻の「中間改札」

かつて JR 鶴見駅の構内(京浜東北線と鶴見線の連絡通路)には、同じ JR の改札内であるにもかかわらず自動改札機が設置されており、これを「中間改札(のりかえ改札)」と呼んでいました。

中間改札の設置の背景のひとつは私鉄時代の名残です。鶴見線はもともと「鶴見臨港鉄道」という独立した私鉄でした。

1944 年(昭和 19 年)に国に買収されて国鉄(現在の JR)へ編入されましたが、会社が変わる境界線の名残として改札構造が引き継がれました。

背景のもう一つは無人駅対策です。

鶴見線は鶴見駅を除くほぼすべての駅が無人駅(または簡易委託駅)です。そのため、乗客の運賃精算や不正乗車防止のチェックを、出発点である鶴見駅の中間改札で一括して行う必要がありました。

近代的な京浜東北線ホームから中間改札を 1 歩くぐると、一転して無骨な昭和レトロの空間(鶴見線ホーム)が広がるため、鉄道ファンからは「都会の秘境・魔界への境界線」として長く親しまれました。

しかし、交通系 IC カードの普及に伴い、2022 年 2 月 27 日をもってこの中間改札は完全に撤去されました。

これにより、JR 東日本管内から定期列車用の中間改札は姿を消しました。

③ 武蔵野線の隠された起点

一般的に「JR 武蔵野線」は、東京都府中市の「府中本町駅」から埼玉県(南浦和駅など)を経由し、千葉県船橋市の「西船橋駅」までを結ぶ旅客路線(オレンジ色の車体)として知られています。

しかし、鉄道の公式な書類(鉄道要覧)において、武蔵野線の正式な起点は「鶴見駅」と定められています。

鶴見駅から府中本町駅までの区間は、通称「武蔵野南線(むさしのみなみせん)」と呼ばれる貨物列車専用の線路です。線路の大部分は川崎市や横浜市の地下を貫く長いトンネルとなっており、普段は一般のお客さんが目にすることはありません。

東京の郊外を大きく迂回して日本全国を結ぶ貨物大動脈の真の出発点が、この鶴見駅の地下や線路構造の中に存在しています。

④ 幻の廃駅「本山(ほんざん)駅」

鶴見駅を出発してすぐの線路脇(国道駅との間)には、現在も使用されていないコンクリート製のホームと、上へと続く階段の跡が残されています。

これは1930年(昭和5年)、西側に位置する曹洞宗の大本山「總持寺」への参拝客の利便性を高めるために設置されました。

しかし太平洋戦争中の1942年、資材の節約や温存などの理由により営業を休止し、そのまま復活することなく廃駅となりました。

閉鎖から80年以上が経過した現在も解体されずに当時の土台がそのまま残されており、電車の車窓からはっきりと見ることができます。

■ 鶴見駅周辺エリア【出発地】

鶴見の地名は、鎌倉時代に源頼朝がこの地で鶴を放った(鶴を留めた)という伝説や、美しく波打つ海岸線を意味する「津る見」に由来すると言われています。

江戸時代、お江戸日本橋を朝に出発した旅人たちが、ちょうど小腹を空かせる昼下がりに差し掛かるのがこの鶴見周辺でした。

そのため、街道沿いには数多くの茶屋や売店が軒を連ね、東海道の主要な「立場(休憩所)」として大変な賑わいを見せた歴史を持っています。

本散策では、古くは弥生時代の聖地から、江戸の宿場文化、明治の近代化、そして昭和の風景まで、約1400年の時を刻む旧東海道の遺構を順に辿ります。

1. 鶴見神社(つるみじんじゃ)

推古天皇の御代(約1400年前)の創建と伝える、横浜・川崎間で最も古い歴史を持つ神社です。

古くは「杉山大明神」と称され、江戸時代には旧東海道の「鶴見立場」の中心として門前町が大きく賑わいました。

大正から昭和にかけて行われた境内調査では、弥生時代後期から古墳時代にかけての土器や、神事に使われた祭祀遺物が多数発見されており、東海道が整備される遥か古来から、この地が特別な聖地であったことが考古学的にも実証されています。

長きにわたり地域の信仰を集め続ける、鶴見の歴史の原点とも言える場所です。

2. 神社の中の寺尾稲荷道道標(てらおいなりみち どうひょう)

鶴見神社境内に現存する、安永5(1776)年に建立された本物の道標(道路標識)です。

正面には「これより寺尾稲荷道」と深く刻まれており、ここから北西に約2キロ離れた馬場(ばば)の地に建つ「寺尾稲荷(現在の馬場稲荷神社)」への分岐点を示していました。

当時、寺尾稲荷は「馬の守護神」として、また「長患いの咳を止める神様」として江戸市中までその名が知れ渡るほどの大変な信仰を集めていました。

街道を行き交う多くの旅人たちが、この石柱を目印にして脇道へと立ち寄っていった往時の賑わいを伝えています。

3. 神社の中の富士浅間社(ふじせんげんしゃ / 富士塚)

鶴見神社境内に築かれた、富士山を模したミニチュアの山「富士塚」です。

江戸時代、民衆の間で富士山を信仰する「富士講」が爆発的に流行しましたが、当時の交通事情や体力的・経済的な理由から、誰もが本物の富士山へ登頂できるわけではありませんでした。

そこで、富士山の溶岩や土を用いて身近な場所に富士塚を築き、そこに登ることで本物の富士山頂にある「浅間神社」へ参拝したのと同じ御利益を得ようとしていました。

限られた条件の中で知恵を絞り、信仰を捧げた当時の人々の熱意が息づく遺構です。

4. 信楽茶屋(しがらきちゃや)

鶴見神社を出て街道を進んだ周辺には、かつて東海道屈指の名物茶屋として名を馳せた「信楽茶屋」が存在していました。

ここを訪れる旅人の目当てが、鶴見名物の「よねまんじゅう」でした。

薄くのばした米粉の生地で白餡や小豆餡を包み、羽二重餅のように柔らかく仕上げた上品な小豆菓子で、毎日売り切れが出るほどの猛烈な人気を誇ったとされています。

その評判は江戸城にまで届き、歴代の徳川将軍が江戸城へ届けるよう命じたほか、『水戸黄門』で知られる徳川光圀も道中に立ち寄って絶賛したという記録が今に手記として残されています。

5. 不思議な魅力を放つモニュメント「旅立ち」(たびだち)

横浜市鶴見図書館前に佇む、高さ約 3.7 メートルの堂々たる彫刻作品。

彫刻家・二口金一氏の手によるもので、1993 年の「第 3 回横浜彫刻展」で奨励賞に輝いた鶴見区自慢のパブリックアートです。

マントをまとった旅人を思わせる独特な三角錐のフォルムが特徴。そのミステリアスな姿は「どこか愛嬌がある」と街の人々に親しまれています。

6. 寺尾稻荷道道標(てらおいなりみち どうひょう / 複製)

旧東海道沿いの分岐点(追分)に立つ道標のレプリカです。

元々はこの場所に、先ほど鶴見神社境内で確認した安永 5(1776)年建立の本物の道標が据えられていました。

しかし、近代以降の道路の拡幅や、貴重な地域文化財を雨風による風化から守るという観点から、本物は神社の境内へと移設されることとなりました。

現在地に建つ複製は、かつてここが大山街道や寺尾稻荷へと向かう歴史的な分かれ道であったという事実を後世に正しく伝えるため、地域の有志によって忠実に再現されたものです。

■ 鶴見川・市場エリア

7. 鶴見橋関門旧跡(つるみばしかんもん きゅうせき)

鶴見川の手前に佇むこの石碑は、幕末の激動期に設置された「関門(関所)」の跡地です。

文久 2(1862)年、近隣の生麦村において薩摩藩の行列を乱したイギリス人が斬られる「生麦事件」が発生しました。

危機感を募らせた徳川幕府は、横浜の外国人居留地を守り、また外国人がみだりに江戸へ侵入するのを防ぐため、主要街道の要所に警備用の関門を急遽設けました。

ここ鶴見橋のたもともその一つであり、当時は物々しい柵が張り巡らされ、武士たちが 24 時間体制で通行人の取り締まりと警戒に当たっていました。

8. 鶴見川橋(つるみがわばし)

徳川家康が慶長 6(1601)年に東海道を整備した際、ほぼ同じ場所に架橋されたのが始まりとされる歴史ある橋です。

当時は「鶴見橋」と呼ばれ、江戸を出発した旅人が東海道で「最初に渡る本格的な大橋」として広く知られていました。

かつて周囲に遮る建物がなかった時代には、橋の上から川の流れの向こうに雪を戴いた美しい富士山をはっきりと望むことができました。

その見事な構図は、江戸時代の絵師・歌川広重の代表作『東海道五十三次』の「鶴見川」にも情緒豊かに描かれており、旅人が足を止めて景色を楽しむ屈指の景勝地でした。

9. 金剛寺(こんごうじ)

鶴見川を渡ってすぐの場所に建つ金剛寺は、平安時代の草創と伝えられる真言宗の古刹です。

江戸時代初期に徳川幕府が東海道を直線的に新設した際、それに合わせる形で街道沿いの現在地へと移転してきました。

この寺は「東国八十八ヶ所」や「東海三十三ヶ所」といった格式高い観音霊場の札所として江戸市中まで広く知られていました。

そのため、一般的な旅人のみならず、江戸近郊から御朱印集めや巡礼に訪れる熱心な参拝者で一年中境内が賑わい、長旅に疲れた人々が喉を潤し羽を伸ばす、街道沿いの貴重なオアシスとなっていました。

10. 市場一里塚(いちばいちりづか / 稲荷社)

旧東海道の大きな節目であり、日本橋から数えてちょうど 5 番目、距離にして約 20 キロメートル地点に築かれた一里塚の遺構です。

徳川幕府が旅人の距離の目安や人馬の休所とするために一里ごとに設置したもので、当時は街道の両側に大人の背丈ほどの土盛りをし、遠方からの目印として榎(えのき)などの大木が植えられていました。

長い歴史の中で大半の一里塚が消失した中、横浜市内に現存しているのはここと戸塚区のわずか 2 箇所のみという極めて貴重な文化財です。

現在は左側の塚の跡地が残り、石碑と稲荷社の祠が静かに佇んでいます。

11. 専念寺(せんねんじ)

市場一里塚のすぐ先に建つ、慶長年間(1600 年代初頭)の開創と伝わる浄土宗の古刹です。元々この地にあった古い「観音堂」が始まりとされています。

本堂の隣にある観音堂には、十一面千手観音菩薩像(通称・市場観音)が安置されています。

この仏様は、平安時代の女流作家であり『源氏物語』を著した紫式部が、生涯にわたり肌身離さず信仰していた「持念仏」であるという、大変ロマンあふれる伝説が残っています。

また、境内の富士浅間宮には、天正年間の富士山大噴火の際にここまで飛んできて夜な夜な光を放ったと伝わる「夜光石(やこうせき)」が祀られています。

これら数々の霊験あらたかな噂は江戸城の大奥にまで届き、江戸後期には 11 代将軍・徳川家斉の正室である「盛姫(もりひめ)」が深く帰依し、熱心に信仰を捧げたという華やかな歴史を持っています。

12. 横浜熊野神社(よこはまくまのじんじゃ)

約 1200 年前の平安時代(弘仁年間)に、和歌山県の紀州熊野三山から神様をお迎えして創建されたと伝わる古社です。

この神社には、明治の近代化に伴う驚くべき移築エピソードが残されています。

元々はここから少し離れた場所に鎮座していましたが、明治 5(1872)年、日本初の鉄道(現在の JR 東海道線)を敷設する際、線路のルートが境内の真ん中を貫通することが判明しました。

当時の氏子たちは神様を動かすのではなく「社殿ごと引っ越そう」と決意。巨大な本殿を丸太に乗せ、クレーンもない時代に大勢の人間が力を合わせ、人力だけでこの旧東海道沿いまで引っ張って移築を成し遂げました。

■ 八丁畷(はっちょうなわて)・市境エリア

13. 夫婦橋(めおとばし / 女夫橋)

かつてこの交差点付近に架かっていた「夫婦橋」は、江戸時代における武蔵国の「市場村(現在の横浜市)」と、宿場町である「川崎宿(現在の川崎市)」の正確な境界線、すなわち「国境」であり「市境」でした。

当時は、農業や物資運搬に使われた二ヶ領用水の枝線(水路)が街道に並行して流れており、そこに 2 組一対の橋が仲良く寄り添うように並んで架けられていたことからこの名が付けました。

川崎宿へ入る旅人、あるいは江戸へ向かう旅人にとって、エリアが切り替わる重要な目印であり、絶好の休息スポットでもありました。

現在は水路の埋め立てにより消失し、解説板のみが残っています。

14. 百年前 昭和初期の八丁畷駅(はっちょうなわてえき) タイル画

京急線八丁畷駅の旧東海道側に面した壁面に設置されている、見事な地域アート作品です。

このモザイクタイル画は、近隣の川崎市立川崎中学校の当時の 3 年生 135 人が、2021 年春に卒業記念制作として力を合わせて完成させたものです。

1 センチに満たない小さなカラータイルを 10 色使い分け、なんと 1 万枚以上も手作業で貼り合わせて作られた大作(縦 85cm×横 175cm)です。題材となったのは、今から約百年前の昭和 4(1929)年にこの場所で撮影された本物の白黒写真です。

レトロな木造の八丁畷駅舎、線路を走る愛らしい顔つきの赤い京急電車(旧湘南電気鉄道)、そして京急グループがバス事業をこの地からスタートさせた当時の様子を残す唯一の姿である「ボンネットバス」が、生徒たちの手によって生き生きと色鮮やかに再現されています。

15. 無縁塚(むえんづか)

京急八丁畷駅のすぐ近く、線路沿いにひっそりと佇む無縁塚は、華やかな街道の歴史の影にある、人々の哀悼の思いが詰まった慰霊の地です。

江戸時代、川崎宿は大いに繁栄していましたが、その一方で、長旅の途中で行き倒れてしまった身寄りのない旅人や、度重なる多摩川の大洪水、あるいは大飢饉によって、この周辺で数え切れないほど多くの人が命を落としました。

そうした不運な人々を哀れんだ地元の宿役人や住民たちが、遺体を一箇所に集めて手厚く葬り、この塚を築きました。

大正時代にも多くの遺骨が発見され、改めて供養塔が建てられています。

16. 松尾芭蕉句碑(まつおばしょうくひ)

無縁塚のすぐ隣に建つ、日本を代表する俳人・松尾芭蕉の歴史的な句碑です。元禄 7(1694)年 5 月、芭蕉が長年住んだ江戸を立ち、故郷の伊賀へ向かう際のエピソードが刻まれています。

江戸から川崎宿の端であるこの八丁畷まで、熱心な弟子たちがはるばる見送りにやってきました。

いよいよ本当の別れという刹那、芭蕉が弟子たちとの切ない名残惜しさを詠んだのが、「麦の穂を たよりにつかむ 別れかな」という名句です。

芭蕉はこの年の秋に旅先の大坂で生涯を閉じたため、ここが弟子たちとの「生涯最後の別れの地」となりました。

今も周囲には本物の麦が植えられ守られています。

17. 八丁畷の地蔵尊(はっちょうなわて の じぞうそん)

京急線の踏切脇に佇むお地蔵様です。そもそも「八丁畷」という地名の由来は、お隣の川崎宿の入り口まで、およそ「八丁(約 870 メートル)」にわたって、田んぼの真っ直ぐなあぜ道(畷)が続いていた田園風景に由来しています。

この地蔵尊は江戸時代、先述の飢饉や災害で命を落とした多くの人々を慰め、供養するために建立されました。

それと同時に、夜になると漆黒の闇に包まれてしまう寂しいあぜ道を、不安な気持ちで歩く旅人たちを温かく見守り、道中の安全を護り続けてきた慈悲深いお地蔵様です。

18. 芭蕉ポケットパーク(ばしょうぽけつとぱーく)

川崎警察署のすぐ横のマンション「ビバース日進町」の 1 階敷地内に位置する、歴史散策のためのユニークなミニ公園です。

すぐ近くにある松尾芭蕉の「生涯最後の別れの句碑」にちなんで整備されましたが、こちらのパークは芭蕉をはるばる江戸からここまで見送りにやってきた「門弟(弟子)たち」にスポットを当てているのが大きな特徴です。

敷地内には、芭蕉の才能を慕って集まった熱心な弟子たちのうち、22 人の俳句が刻まれた石柱がズラリと建てられているほか、特にゆかりが深かった高弟 7 人の句が刻まれた立派な石盤も設置されています。

また、東海道の歴史的な景観を壊さないよう、和風のシックなラッピングが施された特別な自動販売機が置かれているのも注目ポイントです。

かつて街道の随所に設けられ、旅人が荷物を下ろして一息ついた「立場(休憩所)」の役割を、現代において担っている大切な給水休憩スポットです。

■ 川崎宿エリア

19. ここに幸あり(ここにさちあり / 歌碑)

八丁駅近くに建立されている、昭和 31(1956)年の大ヒット歌謡曲『ここに幸あり』(歌:大津美子)の立派な歌碑です。

戦後の復興期、懸命に生きる日本人の心に深く寄り添い、大きな希望と活力を与えた名曲として知られています。この歌碑がここに設置された理由は、この素晴らしい歌詞を書き上げた作詞家・高橋掬太郎が、当時この川崎の地に深いゆかりを持っていたためであり、彼の功績を後世に称えるための記念碑となっています。

20. 川崎宿京入口(かわさきしゅく きょういりぐち)

東海道五十三次の中で 2 番目の宿場町である「川崎宿」の、京都側から見た場合の最初の玄関口にあたる場所です。

江戸時代、宿場町の境界には防衛と治安維持のために「土手」が築かれ、頑丈な「木戸(門)」が設けられていました。

夜間になるとこの門は完全に閉鎖され、宿場町全体の安全が守られていました。

この京入口を一步中に入ると、それまでの寂しいあぜ道とは打って変わり、道の両側には数多くの旅籠(旅館)や商店、飲食店がズラリと立ち並び、活気あふれる宿場町の世界へと繋がっていました。

21. 小土呂橋(ことろばし / 親柱)

旧東海道が、かつて物資の運搬や排水に使われていた水路「新川堀」を横断する場所に架けられていた歴史ある石橋の遺構です。

昭和初期の道路拡張に伴って水路は埋め立てられましたが、花崗岩で作られた高さ 130 センチの立派な親柱だけが交差点脇の歩道に大切に保存されています。

江戸時代中期の享保 14(1729)年には、8 代将軍・徳川吉宗公がベトナムから注文した本物の象が、長崎から江戸城へ向かう道中にこの橋を渡ったという大変ユニークな記録が残っており、当時の宿場町に大ブームを巻き起こしました。

昭和 60 年の道路陥没の際には地下から当時の橋脚等も発見され、現在は稲毛神社境内に遺構として復元されています。

22. 旧橘樹郡役所跡記念碑 設立の記(きゅうたちばなぐん やくしょあと きねんひ)

かつてこの地域一帯の政治・行政の最高中心地であった「橘樹郡(たちばなぐん)の役所」の跡地を示す重厚な記念碑です。

「橘樹郡」とは、現在の川崎市全域や、横浜市の鶴見区、神奈川区、保土ヶ谷区などを含む、非常に広大なエリアを管轄していた古い郡の名称です。

明治 14(1881)年から昭和初期に郡役所が廃止されるまでの間、まさにこの場所に近代的な庁舎が建てられ、地域の発展のための重要な行政を担っていました。

この周辺が、近代日本においても地域全体の圧倒的な中心地であった証です。

23. 佐藤惣之助生誕の地(さとうそうのすけ せいたんのち)

大正から昭和初期にかけて日本の文化・音楽界を牽引した偉大な詩人であり作詞家、佐藤惣之助が生まれ育った場所(記念碑設置場所)です。

彼は日本の音楽史に残る数々の不朽の名作を手掛けました。

最も有名な作品として、阪神タイガースの圧倒的な応援歌である『六甲おろし(阪神タイガースの歌)』、夏の高校野球の大会歌『栄冠は君に輝く』、そして美空ひばりら多くの歌手に歌い継がれた『人生劇場』などがあります。

川崎の賑やかな街道の空気を感じながら育った彼の感性が、日本中を元気づけた数々の名フレーズを生み出しました。

24. 佐藤本陣跡地(さとうほんじんあとち)

川崎宿に 3 軒あった最高級旅館「本陣」の一つである「佐藤本陣(上の本陣)」の跡地です。

本陣とは、参勤交代で行き交う全国の大名家や公家、あるいは幕府の最高級役人といった、特別な VIP

だけが宿泊を許された格式高い旅館を指します。

幕末の文久3(1863)年には、14代将軍・徳川家茂が大軍を率いて京都へ上洛する道中に、この佐藤本陣に実際に宿泊したという輝かしい記録が残っています。

そして、先述の作詞家・佐藤惣之助は、この名門・佐藤本陣の直系の子孫であり、歴史の不思議な繋がりを感じさせるドラマチックなスポットです。

東海道川崎宿石碑(とうかいどうかわさきしゅく せきひ)

本散策のゴール地点に建つ、川崎宿の歴史を称える大きな石碑です。

川崎宿は、元和4(1618)年に、東海道五十三次の中で「最も新しく、最後に正式に認められた宿場町」となりました。

ここから多摩川を渡る「六郷の渡し」の手前までのエリアには、数多くの旅籠や茶屋、小料理屋がひしめき合い、江戸を出発した旅人の最初の宿泊地として、あるいは江戸へ入る直前の最後の宴会の場として選ばれました。

夜遅くまで明かりが消えないほどのすさまじい繁栄を極め、東海道の発展を大きく支え続けた宿場町です。

○ ゴール地点の交差点「砂子」を「いさご」と呼ぶのは？

多摩川の砂が堆積してできた「砂地や砂州(さす)」という地形そのものを指す古くからの言葉が由来だからです。

又、平安時代初期の伝説で地元の漁師が海岸で拾い上げた薬師如来の像を「砂の上に安置して祀った」ことから、この地が砂子(いさご)と呼ばれるようになったという言い伝えもあります。